

相撲の歴史 釈文②

第一部 相撲の起り

①

見聞雑記集卷之八

戌

小柴研斎 輯

御行司より相撲の書上 写 于時 亥

六月十一日 上覽

相撲の起は 天照大神の時より始、朝廷にて
垂仁天皇の御宇、相撲の節会せちえ被_レ行候へ共、
未御作法不_レ正、争の端のみに相成、勝負の裁
断難_レ決、聖武天皇神龜年中、奈良の都に
おいて近江国志賀の清林と申者を召、御
行司に定められてより、相撲の式委鋪相備、
子孫相續の処、多年の兵乱相續、節会被_レ
行不_レ申、志賀家も自然断絶仕候

一 後鳥羽院文治年中、再相撲の節会可_レ被_レ行候、
志賀家断絶の上は、御行司可_二相勤_一者普く
御尋御座候處、私先祖吉田豊後守家次と申
者、越前国罷在、志賀の故実伝来仕候旨、達_二
叡聞_一、被_レ叙五位_一、追風の名を賜、朝廷御相撲の
司行司に可_レ申被_レ定置_二之旨_一、蒙_二勅命_一、此時召合
用候木鋌・獅子王の御団扇を賜、代々相撲之

②

節会御式相勤申候、亦承久の兵乱発、節会も
中絶仕候

一 正親町院永禄年中、相撲の節会被行候處、十

三代目追風罷出、如旧例相勤申候

一 元龜年中、二条関白晴良公より、日本相撲の作

法、二流無之との事にて、一味清風と申、御団扇、

并烏帽子・狩衣・唐衣・四幅之袴被下置候、其後

信長公・秀吉公・

権現公様御代共、度々相撲の式相勤、元和五年

九月十七日、於紀州和歌山

東照宮御祭礼相撲の式、依 御頼御祭礼奉

行、朝比奈惣左衛門殿と諸事申合相勤申候、依之

御刀拝領仕候

一 十五代目追風に至、朝廷相撲の節会も自然と

中絶成行申候、二条様御家にて相撲に付、御懇の

筋を得御座候付、他へ罷出申度段相願候處、願

之通相叶、万治元年より当家へ罷出相勤申候

一 元禄年中、

常憲院様牧野備後守様へ被為成、相撲

上覽の節、彼方様御家来鈴木梶右衛門と申仁、

入門の御頼有之

將軍家 上覽の式相伝品々拝領物仕候

一 元祖より私迄、都合十九代、前文の通

禁裡其外の御方様より追々拝領の品今以

持伝、相撲の故実伝受仕来候

一 当時諸国の行司并力士共への免許、私家

より代々差出申候

右の通御座候、以上

細川越中守家来

寛政元酉年十一月 吉田善左衛門

谷風への免許伝授の写

免許

一 横綱の事

右は谷風梶之助、相撲の位、依て授与
畢、已来方屋入之節迄相用可申候
依て如件

寛政元酉年十一月九日

本朝相撲之司行司

十九代

吉田追風 判

- 後鳥羽天皇（第82代 在位 1183—1198）
- 正親町天皇 第106代在位（1557—1586）
- 元龜年中 （1570—73）
- 元和五年 1619年 江戸時代2代秀忠の時代
- 元禄年中 1688—1703年 江戸時代中期